

(株)ブリテイッシュ・ヒルズ顧問・名誉館長 川田雄基

日本における男爵薯の始祖 川田龍吉が目指した農工共栄

2008年は国連が定めた「国際イモ年」である。また奇しくも、日本における男爵薯の播種が始まったのが、ちょうど100年前の1908（明治41）年。種イモを米英から輸入したのが、川田龍吉男爵であった。現在の三菱グループの前身である三菱会社を経て、農業経営に携わったことは知られているが、農業に対する深い思いはあまり伝わっていない。バックボーンにあったのは「農工共栄だった」と、川田龍吉氏の孫である川田雄基氏は話す。

ルーツは土岐源氏だったが
土佐では不遇の境地に

昆吉則（本誌編集長） 川田さんとは、私の妻が勤務しています英国大使館関係のイベントで何度かお会いしていますね。非常にジェントルマンである方だという印象は持っておりましたが、ジャガイモの男爵薯を持ってこられた川田龍吉氏のお孫さんだと実は認識しておりませんで

した。部下から言われまして改めて認識した次第です、大変失礼しました（笑）。

川田雄基（株）ブリテイッシュ・ヒルズ顧問・名誉館長 いえいえ（笑）。こちらもいろいろと大変お世話になっております。

昆 さて、早速本題に入らせていただきますが、今年国連が定めた「国際イモ年」です。同時に、日本の男爵薯の生誕が今年で100年目にあたる、非常に記念すべき年で

あります。だからといって、単に懐古趣味や知識のひとつとしてジャガイモ普及の歴史をお聞きするのではありません。ジャガイモという日本にはなかった野菜を定着させた川田さんのお祖父様、龍吉氏のマインドに私自身や読者が学ぶべきことがあると思っっている次第です。壮大なお話になるかと思いますが、歴史を含め、お祖父様の人となりをお聞かせください。

川田 日本史の話にもなってしまうますが、昆さん、覚悟してくださいね（笑）。祖父は高知の出身ですが、私ども川田家のルーツは美濃の土岐源氏だとされています。明智党という一族に属しましたが、あの本能寺の変以降、明智の一族はあらゆる戦に負け続けてしまっ、土佐の方に追いやられてしまったのです。

昆 かつて土佐は流刑の地にされたという話もあるぐらいですから、未開の地だったのでしょね。

川田 おっしゃる通りです。そして土佐藩では、関ヶ原の敗戦で山内氏が新領主として乗り込んでくると城中に勤務するエリートではなく郷土になってしまった。いってみれば地方の下級武士階級に成り下がったわけです。当時は身分差が厳しい時代でしたし、世が世なら立場は逆転していたわけですから、ご先祖は非常に忸怩たる気持ちを持っていたのではないかと思われれます。

昆 なるほど。

川田 しかし、幕末には、土佐では郷土が中心となって様々な動きを起こしてやがて倒幕、明治政府を樹立させる一役を担いました。また、郷土からは政商と呼ばれる実業家も誕



生します。その一人に、現在の三菱グループの前身にあたる三菱会社を興した岩崎弥太郎がおりますが、龍吉の父、小一郎は弥太郎の右腕として活躍していました。

スコットランド人と 通じ合う「いぶっこころ」

昆 曾祖父の小一郎氏は、日本銀行総裁にもなられて、男爵の爵位も授与されたそうですね。

川田 そうなんです。それで、祖父は曾祖父からの勧めもあって、1877（明治10）年からの7年間、スコットランドに渡り、留学することになりました。

昆 スコットランドではどちらで何を学ばれたのですか？

川田 グラスゴー大学で造船技術を学びました。明治10年は西南戦争（西郷隆盛を中心とした士族の反乱）も起こった年ですが、三菱会社では明治政府の軍事輸送も担っていました。三菱会社自前の船を造る必要があると考えがあったのでしうね。

昆 今みたいに気軽に留学できる時代ではないですから、現地での生活は相当大変だったのではないのでしょうか？

川田 高知とスコットランドでは気候もまるで違っていますし、望郷の念はあったでしょうね。でも、スコットランド人とは意気投合し、非常に優しく接してくれたそうです。

昆 なぜですか？

川田 実は、スコットランド人と高知の郷土は置かれた立場が似ているんですよ。英国は4つの国家からなる連合国家ですが、長らくの間イングランドの支配下にありました。そのため、イングランドには複雑な感情を持っているのです。

昆 労働者階級と呼ばれる層が多いのもスコットランドですよ。

川田 造船技術が進歩したのもそのためで、イングランドで学問といえ、文学であったり法律であったりといわゆる机上のものがほとんどであったのに対して、スコットランドでは実学を重んじているからこそ、



川田雄基

■プロフィール（かわだ・ゆうき）

1936年東京都生まれ。59年学習院大学政経学部卒業後、三菱商事(株)入社。マニラ駐在員を振り出しに、シンガポール、マレーシア長期出張員、米国ニューヨーク勤務、英国、フランス、ドイツなど世界各国を歴訪出張。93年神田外語グループの国際研修機関「ブリティッシュヒルズ」（福島県天栄村）発足に際して、取締役および館長に就任。現在、ブリティッシュ・ヒルズ顧問・名誉館長を務めるほか、英国文化の伝統や歴史、美術を伝えるために多くの著作および講師活動を行なっている。

なのです。権威や権力に阿ねらない土佐人の気質を表現する「いごっそう」という言葉がありますが、祖父はまさにそういう人物でした。また、そういったところがスコットランドの気風にあったのでしょうか。

昆 ところで、まだジャガイモが出てきませんか(笑)。



写真右：当時の清香園農場があった場所に立つ、男爵薯発祥の地の石碑。

写真左：七飯町では男爵薯誕生100周年記念イベントが開催され、10月5日には川田氏の講演会も行なわれた。



本はいつまた戦争が起こるかわからない時代でした。日本の場合、軍の食料調達という手段をとっていましたが、欧米諸国では生産します。その中心がジャガイモです。栽培に特別な手間を要しませんから、その重要性を知っていたのではないのでしょうか。

川田 お待たせしました、ここからです(笑)。実はスコットランド留学中に現地の女性と恋に落ちているんですよ。結婚を約束するまでの仲だったようですが、彼女とのデートの際にバターを乗せたジャガイモを食べたという記述が、文献の中にありました。

昆 随分とロマンチックなお話ですね、そのような淡い思い出からジャガイモを育てることになったとすれば。

川田 いや、それだけが理由ではないと思います。当時、日

先進国ならではの農業を目指した祖父

昆 さて、帰国されてからはどのような経緯で農業に携わるようになったのですか？

川田 三菱会社を経て、横浜船渠会社の初代社長に就任します。1906(明治39)年には、経営不振だった函館船渠会社の経営再建に取り組みることになって、北海道に渡りました。

北海道では函館郊外の七飯村(現在の北海道七飯町)に土地を購入し、清香園農場という農場を開設しました。米国から大型農業機械を導入し、酪農のほか、レタスやアスパラガス、あとはイチゴなどを育てていました。

昆 そうすると、種イモも輸入して植付けたということですね。

川田 1908年に「サットンズ・フラワー・ボール」なる種イモをイングランド・バークシャー地方の種苗商から、「アーリー・ペトスキー」という名の種イモを米国・マサチューセッツ州の種苗商からそれぞれ買ったという記録があります。これらがいずれもアイリッシュ・コブラーという種イモ品種だったわけですね。もともと、すぐに広まったわけ

はなく、農場で雇われていた人が種イモとして持ち帰って自分の畑に植えたところ、予想外の高収量を得られたことがきっかけとなったようです。名前をどうしようかということになって、祖父の爵位から名前を取ったようです。

昆 小岩井農場などもそうですが、戦前まではエスタブリッシュメント層が農場経営に携わるケースが見られました。祖父の龍吉氏の場合、農業に対するどのような思いがあったとお考えですか？

川田 祖父は造船技術で身を起こしましたが、先進国は工業だけでなく農業でも栄えるべきだという「農工共栄」が持論の人物でした。「いごっそう」であったこと、そしてスコットランドでの経験が影響しているのかもしれない。また、モットーが「口の泡より腕の汗」でしたから、農業へのシンパシーがあったのではないのでしょうか。

昆 川田龍吉氏が目指された農工共栄という意味で言えば、農だけが一歩も二歩も遅れているのが現状です。そのためには、それこそ龍吉氏のような進取の精神に満ちあふれた経営者が台頭できる状況にしておく必要がある、そのような思いを強くしました。本日はとても勉強になりました。ありがとうございました。